

## レファレンス

### コーナー

#### 国際保健医療の現場から

佐々木茂子

「西暦二〇〇〇年までに全ての人に健康を」という目標が定められたのは、一九七八年にWHOとユニセフの呼びかけにより、カザフ共和国で開かれた国際会議の場であった。

また、二〇〇〇年のミレニアム開発目標では、二〇一五年までに達成すべき目標として八項目が掲げられたが、この内の四項目が健康・医療に関するものである。しかし、こうした目標にも拘わらず、開発途上国では未だに、先進国であれば「死ななくてすむ」病気で多くの生命が失われている。貧困や水不足、保健・衛生教育の欠如が主な原因としてあげられるが、頻発する紛争や自然災害が更に追い討ちをかける。この度ミャンマーと中国を襲ったような大災害は、直接人命を奪うだけではなく、その後も長く人々の健康を脅かす原因となる。本稿では、世界各地で展開する国際保健医療活動について、最近の資料を紹介する。

従来、国際保健医療の中心となってきたのはWHO、ユニセフ、世界銀行等の機関であるが、秋山孝允・近藤正規編著『開発アプローチと変容するセクター課題』（国際開発高等教育機構 二〇〇四年）はその第

三章で、国際保健医療協力の流れを整理し、各機関の戦略と活動内容を分析する。国際保健医療において、疾病別の「縦割り」の政策と、プライマリーヘルスケアのよつな「横割り」の政策のバランスをとることが望ましいが、現状では成果の出しやすい「縦割り」のプロジェクトが主流のことである。

我が国では、一九八六年に国立病院医療センター内に設けられた国際医療協力部（後の国立国際医療協力センター）が国際保健医療協力の拠点となる。『国際保健医療ハンドブック 保健医療分野で国際協力をめざす人へ』（二〇〇一年）は、同センターが関わったプロジェクトの経験を元に、協力実践のノウハウをまとめたものである。また、前述の国際協力部の初代部長を務めた我妻亮著『保健医療分野のODA 陰から光へ』（勁草書房 二〇〇六年）は、著者が現役中に視察・評価した過去のプロジェクトを取り上げ、計画策定上の問題点を指摘する。

国際医療ボランティアの案内書として、吉田敬三編『なぜ医師たちは行くのか？ 国際医療ボランティアガイド』（羊土社 二〇〇三年）がNGOの現場の声を伝えており、巻末の「国際医療ボランティア団体情報一覧」が参考になる。大塚吉兵衛編著『国際貢献 医療に携わる人たちのために』（ヒューロン・パブリッシング 二〇〇八年）は開発途上国の現状や重大な感染症の解説など、

国際医療貢献に必要な基礎知識を網羅し、統計データも豊富である。

国際保健医療では、現地の習慣や文化に配慮しなければ十分な成果は得られない。松園万雄・門司和彦・白川千尋編著『人類学と国際保健医療協力』（明石書店 二〇〇八年）は、「欧米型のバイオメディカルモデルに偏りがちな国際保健医療において、文化人類学的な知見」が有効なのではないかと考察する。また、青山温子・原ひろ子・喜多悦子著『開発と健康 ジェンダーの視点から』（有斐閣 二〇〇一年）は、著者それぞれが専門分野で携わってきた国際保健医療学を、ジェンダーの視点から見直したものである。

実際に現場で活動する人々を紹介するものとして、丸山直樹著『ドクター・サーブ 中村哲の二五年』（石風社 二〇〇一年）は、長年アフガニスタンで医療活動に携わる中村医師の足跡を辿る。早魃が起れば井戸を掘り、小麦を送る中村医師自身の著作には、『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房 二〇〇五年）、『医者、用水路を拓く』（石風社 二〇〇八年）ほかがある。一方、山本敏晴著『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ 望まれる国際協力の形』（白水社 二〇〇四年）は、緊急医療援助型NGOのプロジェクトに参加した体験をまとめたものである。著者はこの中で、自己満足的な国際医療活動に対して苦言を呈し、持続的な国際協力のあり方について

考察する。

この他に、谷口昌三郎著『エイズ最前線 死の川のほとりからタイの若者を救え』（北部タイ農村振興支援会 二〇〇三年）、花田恭・青木公編『バルテラとともに地域保健ニカラグアの村落で三三人の記録』（はる出版 二〇〇五年）、などがあげられる。

国際保健医療分野におけるメンタル・ヘルスに着目するのは、喜多悦子著『紛争時 紛争後におけるメンタル・ヘルスの役割』（国際協力機構国際協力総合研究所 二〇〇五年）である。著者は、紛争と地域メンタル・ヘルスについてカンボジアとアフリカの事例をあげて論じている。また、宮西照夫著『風エル・ウィエント 内戦の傷跡を深く残すマヤ人の集落を訪ねて』（クリエイツかもがわ 二〇〇五年）は、内戦で家族を失った女性たちの外傷後ストレス障害に関する聴き取り調査をまとめたものである。

最後に、あまり知られていないのが、緊急医療援助で活躍するキューバである。吉田太郎著『世界がキューバ医療を手にするわけ』（築地書館 二〇〇七年）は、ソ連崩壊後の経済危機を乗り越え、自国の医療水準を維持してきたキューバに関する詳細な報告書である。「WHOも認める医療大国」キューバの活動は先進諸国にとっても示唆に富む。

（ささき しげこ）アジア経済研究所図書館